

うろニアソロジー 二〇一八年版



うろこアンソロジー ニ〇一八年版

目次

ホルスタインの町から	南原充士	3
ホワイトタイガー	鵜飼千代子	7
転がり絵本	清水鱗造	10
オペラ・エクローグ 『同級生夫婦』 第4回(最終回)	有働薫	12
古塔	海埜今日子	22
冬至のころ、黎明の声―平成の時の終わりに―	富澤守治	25

ホルスタインの町から

南原充士

気の遠くなる 本棚いっぱいの本の背表紙
とても図書館員にはなれません

漢文 英文 仏 独 露……

世界には二百もの国があり
多くの民族と文化があり
何十億もの人間がいます

名前さえ知らないで この同じ時に
同じ地球上で暮らしている
どこかで風ぐらいは吹き交わしているだろうか

すれちがった車の中にとびきりかわいいこがいても
たった一秒のフィルムはたちまち消え失せ

牧歌的な気分で ホルスタインの
ゆったりした歩みを眺める

にがみはポップで
あまみはビートで

花の香りは小さな町中にひろがり
みつばち族はぶんぶんとやってくる

顔を見合わせた人びとから笑みがこぼれ
野山を散策する夏らしい装いが

いつもより気持ちを浮き浮きさせているようだ

(でも先週に祖父を亡くし

姉の子供は重い病気で入院したままだ)

こうして自分の足で歩き 元気に叫び声を上げられるのは
なんていいだろう

広々とした畑の間に 青い屋根 赤い屋根の

かわいい家が散らばり

線路が曲がって町の中を通っているのが見える

まわりを低い山に囲まれ

遠く稜線にはかすみがかかっている

ぐるぐると三百六十度回って空を見上げ
草むらの上に寝転んで

とうもろこしをかじり お茶を飲んだ

あとはバイクにまかせて 空いた道路を
風を切って走ろう

みゆきちゃんを後ろに乗せて

汗ばむ午後の時間のゆったりした流れを

斜めに過ぎていく直線のような
軌跡が

空から見れば 見えるように

ホワイトタイガー

鵜飼千代子

好きすぎて噛んじやったのかな？

鹿児島市平川町 平川動物公園のホワイトタイガー

お兄さん死んじやったよ

死んじやうとね、もう遊べないの

ホワイトタイガーのリクくんは殺処分されないのね

ねえリク

明日からお兄さん居ないんだからね

だから、噛んじやダメだったんですって

リクは生きていくけど

お兄さんが居ない生涯は生殺しかな？

だから、噛んじやダメだったんですって

お兄さんと遊べなくなつて

一番悲しいのは

リクだよ

ねえリク、

お兄さんの分まで生きて

お兄さん、お空でリクと

沢山遊んでいるよ

お空に行くまで

ち
よ
っ
と
待
っ
て
い
て
ね
だ
ね

転がり絵本

清水鱗造

王子という字に点を加えれば玉子

キャベツの頭に仕込んだ茹で玉子が出てきて

王子の顔をしている

だけど玉子は食べ物なので

おでんの汁に入れて煮る

真っ青な水がたたえられている

畑の向こうの用水池

いろんな形の野菜が花を付けて歩きだし

自分の背丈より長い杖を持つて

行列する魔術師たち

と違って近づいたら

釣り竿を持った子どもたちだ

白い紙で筆算していたら

左上に黒いものが動いていく

手押し車を押して歩く二ミリメートルのおばあさん
紙の上を歩いている

黒い粒

虫眼鏡で観察すると

小さな甲虫

真珠が転がった音がしたと足元を見たら

ダンゴゴムシが丸くなって転がった

ころころころころ

オペラ・エクローグ 『同級生夫婦』 第4回（最終回）

有働薫

第2幕第2場

（モーツァルト邸の居間 第1場の続き。）

テーブルの赤いチューリップが挿してある花瓶はそのまま。

部屋着のモーツァルト夫妻がソファで休んでいる。第1場の午後。モーツァルトは雑誌を読んでいる。）

モーツァルト…（雑誌を読む）《わたしが旅したころの、アフガニスタンもネパールもインドもまだのどやかで素朴な交流ができた。アフガニスタンのバンデアミールの湖に行く途中の草原には水の綺麗な小川が流れ、周りには野生の色とりどりのチューリップが咲いていた。私たちはその小川の淵に坐ってお昼を食べた。カブールは平和で穏やかだっ Comdin。》（*詩誌「りんごの木」47号 2017年12月 荒木寧子の後記より）

(マリーのほうへ顔をあげて)

これ、日本の詩の雑誌。女性詩人の文章だけど、ぼくがチューリップが好きなのがわかるだろう？ 目に見えるようだね。

マリー… わあ、いいわね、こことおんなじじゃない？

(モーツァルトはピアノを弾き出す。第1場と同じクラリネット協奏曲第二楽章のフレーズをピアノで。アフガニスタンのチューリップの草原の風景に重ねてずっと弾き続ける。)

(舞台が徐々に暗くなり、真暗な中にひときわ明るくフレーズが流れた後
左上のスポットライトの中に赤い楽長服の若いモーツァルト2世が立つ)

(詩の朗読)

「蓬猫——早川氏に

からだが痒かったので

よもぎ猫は柔らかそうな土を選んでうずくまった

あたりに少し耳を澄まして安心すると

あおむけにごろりとごろがり

背中を親愛な地球の土に力いっぱいこすりつけた

ゴリゴリと音がするまで

背骨がひりひりしてくるまで

よもぎ猫の気分は和らいでいった

からだを起こし手足を折り前足を胸の下に隠して

正しく坐った

丸いボール 太った鳩のように

「まず ふつうの猫であること 話はそれからだ

愛とは一緒にいること

日毎の食事を共にして

静かにふたりでいること

だまってそれぞれ自分のことをしながら

ときおり視線をかわすこと

姉も死んだ 母も去った

父ははじめから知らない」(「セルヴォ」第1号 1994年9月)

(オルガン曲アンダンテへ長調k616 が流れる)

(暗転)

第2幕第3場

（モーツアルトが死を迎えたウィーン郊外のアパート。人気がなく乱雑な室内。テーブルの上に書きかけの楽譜が散らばり、部屋着のモーツアルトが楽譜の上に顔を落としている。）

モーツアルト…（楽譜を書きながら「疾走するモーツアルト」（有働詩作品）を朗読）

ところで最近ぼくはこの世の通貨に欠乏しています

預金という社会インフラがまだ整備されていないし

ぼくは5歳の頃から働いてきましたが

王侯貴族の前でピアノを弾いて報酬を得る芸術的労働も

現金でなくて大抵はいらなくなった懐中時計とか古めかしいデザインのブローチとか

ザルツブルグの家にはざらざら残してあるよ

雇い主の大公と衝突してやむおえずフリーランスのさきがけとなってからは

大衆やまだ小規模なブルジョアからも注文が入りますから

仕事がなくてぶらぶらするなんてラッキーなことはまずないんです

いつも超忙しくしていますよ

借金魔だとか金銭感覚ゼロとか衣食住あげて贅沢三昧と誇られているのは知っています
死の1カ月前のこと、猛烈な食欲に襲われて、当時手に入れにくかった高級な肉を
思う存分食べた夜があった、かったなあ、あれがやすらぎの国への長旅のための弁当だっ
たんだな

ぼくはほとんど一生涯両親にはよい息子だったし
妻を愛していました

生活費が怖ろしいほど逼迫する前は姉さんとも仲がよかった

ぼくは人をいじめたことなんかないよ、忙しすぎてそんなぜいたくをする暇はなかった
あの世に着いたら

あの温泉好きだった唐の太宗皇帝に拝謁するのが楽しみ

〈飛炎雪晨 人世有終 芳流無竭……〉

玉詩をアリアにして御前演奏するのさ 滞在費ぐらいいは稼げるだろう……
ねえ、マリー、きみが歌ってくれるね？

(舞台は明るい)

(豪華なステージ衣装で、ピアノの前)

モーツァルト…死んでもバリバリ働くのが俺流き、ははは!

ところで死ぬ間にヒットしたオペラ『魔笛』のパパゲーノだけど

台本を書いたシカネーダーが自分自身で演じようと考えたキャラだが

ぼくにそっくりじゃないかしら

けっこううそつきだし、策士だし(ぼくはうそつきでも策士でもないけど)、騒がしいし、でも生き生きしてるよ(こっちのほうはぼくそっくりだ)、

俺たちは小鳥の化身だ、空を自由に飛び廻る……

この世でひどい目に遭った人間も、無難で安穏な生活を満喫した人間も

報われても報われなくとも

マリーやぼくなんかのようになんかやって

ほんとうにきれいな土地でゆっくりしている

(左手のスポットライトに第1幕第3場のシーンが戻る。テークラが窓辺で手紙を読んでい
る。)

《私達のこととはよく似合っていて、彼女もどちらかというと皮肉家で、私達は一緒になって友人達のひやかしを愉快にやるのです。》（1777年10月17日付け手紙）

《彼らがとり交わす恋文は二人以外には意味のわからない程、純粹な原始性が流れ、そこには文字や言語の表現をはるかに超えた親しきがあります。……モーツァルトはこの曲を書きながら、おそらく従妹ベエズレのことを想起していたことでしょう。パパゲーナは生命そのもののような美しさで最後を飾るにふさわしい光に満ちています。》（向坂正久）

第2幕第5場

（モーツァルト邸の居間。朝、夫妻はソファアにいます。2台のピアノが置いてある。）

モーツァルト…今日はお客があるんだよ、ルソー先生、そう、パリでお母さんが亡くなる前の日にエルムノンヴィルで亡くなった。現実で会えなかったぶん、いまお会いできるのがうれしい……先生とピアノを弾こう、僕が先生に曲を差し上げる。先生は晩年は写譜をして生活していらっしやった。ぼくの『ドン・ジヨバンニ』も先生に写譜していただけたらよかったなあ。

マリー…今朝、花売りが来てね、先生のお気に入りに入りそうな紫と黄色のアイリスを幾束も買ったわ、いかが？

モー…（マリーがテーブルに置いたアイリスの豪華な花瓶を見やって）先生はもつと小型の花がお気に入ると思うよ、トラノオとか野菊なんか……

マ…珍しい異国の花にもお詳しいのよね、お友達とよく散歩に出られて、遠くまで……

（上手、女執事が訪問客を案内する）

モ…（立ち上がって、いそいそと出迎える）やあ、ようこそ、お運びいただきありがとうございます、ルソー先生！

ルソー…（老人、はにかんで）先生はやめてください、ムシユールソーとだけ……

モー…いや、ぼくが最も敬愛する数少ない先輩でいらっしやる……

マ…（手を差し伸べて迎える）先生、光栄ですわ

ルソー…何と王妃陛下からそんな……

モー…先生、今日は先生とピアノをご一緒したいと思っております。それで2台背中合わせに並べてお待ちしておりました。譜面はここに……

ルソー…それはそれは、しかし、わたしは写譜を生業とする身なのですが、指捌きのほうはどうも、それにもはや高齢ですので……

モー…何をおっしゃいます、いつもご謙遜ばかり…

ルソー…（受け取った譜面をめくりながら）うーん、なるほど…

モー…ねえ、遊びのようなものでしょう？ それがね、これを聴いて、21世紀の日本の作曲家が椅子から落っこちそうになってしまったという曰くつきの曲でしてね（出だしのスタッカート部分を鳴らす）はっはっは！

ルソー…（譜面をめくるにつれて、顔つきが晴れやかになって）なんと、これは気持ちが悪く弾みますな

モー…（ルソーを手前側のピアノに導いて）でしょう？ さあ、行きますよ、わずか4分足らずですから…：タンタンタン、タラララ、タンタンタン…

（マリーはスクリーンを広げてソファに、耳を傾けるしぐさ）

（「2台のピアノのためのハ短調フーガ」K426 全曲演奏、二人とも人が変わったように真剣勝負で、4分間曲の演奏に集中する）

モー…（元の気分に戻って）わっはっはっはっは！

ルソー…（つられて）わっはっはっはっは！ これはこれは！

マリー…（猛烈に拍手）ブラボー、ブラボー！

（3人手をつないで輪になって踊りだす）

モー…運命はこのように手をたたく、ですか！

ルソー…そうそう！

マリー…アツハツハツ！ 運命のおかげで、わたしたち！

モー…（うやうやしく、お辞儀をしながら）先生にこの曲を捧げます！

ルソー…なんと、うれしいことでしょう、生きているあいだには、とても望めなかった

……文字通り望外の喜びです！

（女執事がお茶のセットを運んでくる、マリーが受け取り、アイリスと野草を活けた大きな花瓶のあるテーブルへ）お菓子（ブリオツシュ）を小皿に分けて！

女執事…はい、奥さま！

マリー…大きいブリオツシュでしよう？ パンの代わりになるわよね！

（3人でひっくり返るほど笑う）（お茶のパーティーがはじまる）

（窓の外で、鳥が（鳩か）さっきの出だしのスタックカートを得意げに囀る）

オーケストラが引き継いで演奏するうちにややあつて幕がゆっくりと下りる。

（幕）

古塔

海禁今日子

また、あの古い塔をみた。散歩の途中、あるいはどこか近郊に赴いたとき、それは姿をあらわす。思いがけない入口のよう、けれども、いつもすこしの遠きがあった。丘のむこう、よく育った丈のたかい夏野菜や、葦の群生のむこう、川のあちらがわ、高台の売却地に茂った草、崖の上、雲のした、おおむねの西の方角に。

いつも、ではなかった。以前みた場所に、でかけてもかなわなかった。夢の中でだけ会える人々との逢瀬のように、カワセミがよこぎるのを目撃したように、初雁のように滑空するマガモと遭遇したように、季節になるとその存在をやさしく思い出させてくれる、ホタルブクロ、カラスウリ、ヒガンバナ、あまたの花たちのように。

日没がにぎやかだといった、いないひとよ。夕焼けが川面をうつつすらと肌色に染めてい

る。その上流のほう、または毒をおびて、あぎやかな朝焼け、ああ、天気がくずれるのだな、どちらも西の空、みとれながら、彼をおもう、そのとき、染まった空たちが、にじみあって、のように、塔がそびえるのがわかるのだった。

あの、丘のむこうの木の名前がわからない。すつくと立って、毎年おとずれるたびに、もどかしかった、あれも塔だ、わからないまま、伐採されて、そのむこうに気配を感じた。水のない田んぼ、枯れたまま、銀色にそよぐススキ、へびのぬけがら、しっぽの短イトカゲ、カマキリの卵。用水路のむこうに、ゆく道がみあたらない。

ちいさな遠さと、ぬくもり。わずかな断絶と、いつくしみ。なぜ夜に、塔はかんじられないのだろうか。他人の夢に、そびえているからかもしれない。塔のあかりが、みえないからかもしれない。夜の虫が鳴いている。カネタタキ、マツムシ。月がしらないうちに、ふくらんでいた。部屋の中でクモを逃がす。あかりがゆらぐ。

古い塔は、昼のなかで、ねむって、わたしは、どこかで起きて、だから、たどりつけないのだろうか。橋の上で轢かれてしまった鳩、その痕も西の空だ。川のまんなかでヘラ

サギがさつそうと、崖には雨が降った後だけ、あらわれる湧き水、その奥にて、あちらで、たとえば塔は、気配をうんでいる。なんとあざやかな、いないひとよ。

冬至のころ、黎明の声―平成の時の終わりに―

富澤守治

遠くひびく黎明の音

ときに記憶の底にも問い合わせる。それにしても聞こえない

先祖たちも聞いたろうか？

それさえもわからない、わからないものを語るものとしての神話というもの

よく和のひとと言われるわれわれ、日の昇る国の大きな和の地に住まうというが
それこそは悲しみの多い国、災いの多い国。それでも寄り添い合い生きてきた
これだけは確かにそうだったのだろう

神話のなかにある黎明に住まうわれわれ

いかにして生きるか、どうして生きていくのか

苦悩と欠乏のなかでそればかりを考え続けている
いままでもそう、これからもそう

せめて愛はあれ

性愛であれ、慈愛であれ

ひとはひとであり、むなしさと空腹を満たそうとするもの、満たしてあげようとするもの
の

寒冷からは身体の脇の部分をあたためるもの、叶わねば抱きしめるもの

猛暑からは喉をうるおすもの、日陰は作ろうとするもの

それらばかりは価値のあるものども

悲嘆と苦痛にあっても嘆きのうすいものども

およそ神話からは遠くなり、黎明の声は遠く聞こえる

しかしていにしえより伝わるものには理由がある

この世に根拠のないものなどはない

かようなわれわれを統べるものは何か？

ただ遠き森と湖と入江から聞こえてくるもの

ただそれを歳神の訪れの日々にわれわれがあるかのようにわれわれは待っている

春は来たりて、われらの望みを叶えよ

この傷みを和ませられよと、祈りつつ

※ここでいう「神話」・「黎明」は、この詩によって規定されたミソロジーである。